

ウルシ 育苗方法の 効率化

1 はじめに

近年、国宝や重要文化財の修理に用いられる漆の需要が高まっており、その持続的な生産にはウルシ林の造成が不可欠です。そのためには、苗木の安定供給が重要な課題となっています。

しかし、県内のウルシ苗木生産現場では、種子の発芽率の低さや、間引き・除草等の作業負担が大きいことが課題とされてきました。

そこで当センターでは、令和元年度から令和6年度にかけて、種子の発芽率向上と苗木生産工程の効率化に取り組みました。その成果を活用して、セルトレイやビニールマルチ

(以下「マルチ」)などの農業用資材を用いた新たな育苗方法(以下、「新方法」)を構築しました(図1)。本稿では従来の育苗方法と比較しながら、効率化されたポイント(※)を紹介いたします。

2 育苗の流れ

① 種子の処理

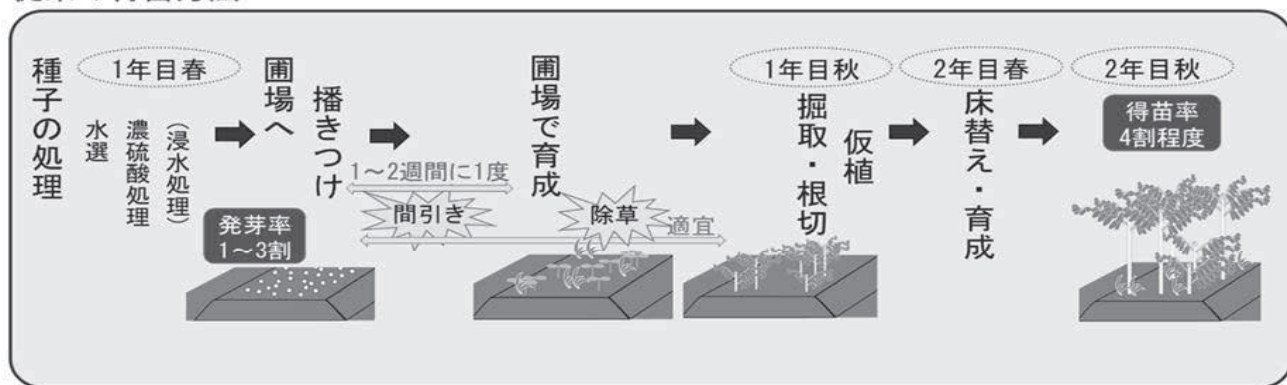
〔従来方法〕 水や食塩水による比重選で種子を選別し、濃硫酸による脱口ウ処理後、常温で10日程度水に浸漬します。

〔新方法〕 高比重の砂糖水(比重1.230)で種子を選別し、同様に濃硫酸で脱口ウ処理後、低温下で2～4週間水に浸漬します。

*新方法では、比重の高い充実した種子を選別できるため発芽率が向上します。砂糖を用いた理由は、水によく溶け、飽和食塩水(比重約1.200)よりも比重の高い溶液を作ることができるためです。また、低温下での吸水により、種子の生理的休眠を打破できるため、発芽のタイミングが揃いやすくなります(写真1)。

*水選では選別率が8割程度^{※1}、発芽率は1～3割^{※2}にとどまりますが、糖水選では選別率が3割程度^{※1}、発芽率は6～7割^{※3}と大きく向上しました。そのため、播種量や脱口ウ処理に用いる濃硫酸の液量、圃場管理面積の削減にもつながります。

従来の育苗方法



新しい育苗方法

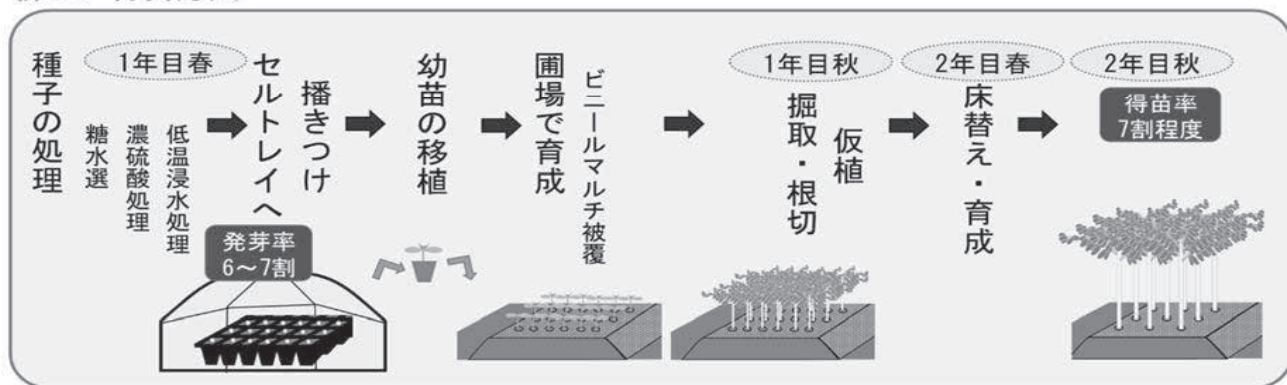


図1 従来の育苗方法と新しい育苗方法の比較

② 播きつけ・幼苗育成

〔従来方法〕 畝立てした畑に種子を30～40粒／100cmの密度で播種し、霜害対策としてワラを敷きます。気象条件に応じて水やりを行います。

〔新〕 鹿沼土とココピートを1:1で混合した培土をセルトレイに充填し、1穴に1粒ずつ播きます。ビニールハウス内の育苗台にトレイを設置し、適宜換気や水やりを行います。

*育苗をビニールハウス内で行うことで、水分や温度の管理がしやすく、品質の揃った幼苗が育ちやすくなります。また、霜の影響を気にせず播きつけが可能です。一方で、土が乾燥しやすいため、適切な水管理が必要です。

③ 幼苗の移植

〔従来〕 5～8月にかけて1～2週間ごとに間引きを実施し、苗間を調整します（写真2）。

〔新〕 セルトレイで育成した中から成長の良い苗を選んで圃場に移植します。

*移植時に苗の選別を行うことで、従来必要だった複数回の間引き作業が不要となります。

④ 苗木の育成

〔従来〕 発芽後の苗を傷つけないように注意しながら手作業で雑草を除去し、2年目も同様に除草します。

〔新〕 畝を立て、マルチで被覆します。1年目は苗間10～15cm、2年目は苗間20cmの間隔でマルチに穴を開けて植えます（写真3）。

*ウルシの苗木は雑草の被圧に弱く、雑草の少ない状態の維持が重要です。新方法ではマルチにより雑草の繁茂を大幅に抑制でき、労力の大きかった除草作業をほぼ不要にできます。資材費や被覆作業の手間は増加しますが、総合的な作業負担は軽減されます。



写真1 〔新方法〕 種子処理後の発芽

3 おわりに

新方法により、発芽率は従来の1～3割から7割程度に向上されました。また、現行の出荷規格（苗高15cm以上かつ根元径9mm以上）を2年で満たす苗の割合も、従来の4割から7割程度に向上しました。

さらに、セルトレイの水管理やマルチの被覆など、資材費や作業は増えますが、間引きや除草といった負担の大きな作業の軽減が可能になりました。



写真2 〔従来方法〕 間引き・除草前の芽生え

本育苗方法の詳細については、今後成果資料として公表する予定です。

※1 岩手県林業技術センター研究成果 速報No.358

※2 生産者から聞き取り

※3 岩手県林業技術センター研究成果 速報No.420

岩手県林業技術センター研究部

専門研究員 中軽米 聖花
019（697）1536



写真3 〔新方法〕 マルチ被覆畝への移植